敵討野路乃玉川

前篇

貳

遠
9735
2

本清

門 975
巻 2

復讐野路の玉川巻之二

滄海堂主人編述

○嵐山の花曇

偖も水尾木屋市兵衛親子ハ三十石の中にて思もよらぬ横事に生る心地もなくして環山が情によりてあやうき難をのがれ半途よりして塘に上りて力右工門主従と同道し○向日の明神の宮前なる向町といへるに至るに七ツ半紅日西に傾くころ此地の旅店にやどりて五人一所にうち

寛ぎ昼の事ども語り合ひて無事と悦ぶる市兵衛は早くも酒肴とりのべ親子あるも力右エ門と饗應の神佛のごとく尊き再生の恩と謝しるぞ所理なり斯て其夜を此舍に旅寐の夢と結びつ翌朝は東雲より起出ぐ力右エ門は京師に用ありて登まるれば嵯峨にいるる連立ては便りをいひしとて此まゝ袂と分らんといふる市兵衛親子は甚残りを多るれど引とゞむべき縁由もあらぬ再び會べき時を期し且伴ひし弟子なる人の姓名とも尋ぬるに是は沖津浪亀を助けて多なる弟子の中にても忠義なる者なりと答るに市兵衛は大に感じ実一人仁なれば一家仁なりと師匠なる人仁なるゆへに其弟子なる人亦忠義なりと只管に賞ぶつ名ごりおしさは山々なれども又爲方もなければ終に双方右と左へ分まてこそ道を急ぐぬ市兵衛親子は夫より長岡の天神粟生の光明寺松の尾梅の宮其余はなほ名所旧跡と見めぐりて行く其日の晩刻前に下嵯峨なる出うり虚空藏尊は明日あん御縁日なれば更めて參詣すべし

環山

ろくひろくてくらくて
おすべくらいあらく
まんぷん
しゝとで
ゆくふ

あのいうえでもでくちのすいわるく
ひとくるアノ越中のたこしまといふ所へ
あんまのものくうんとゆうまろく
かるくこころ
じゃ

沖津浪

モウ〳〵こゝこゝ
いくこゝある
こゝちへ
ござり
ませうん
ゆるさ
ぐさぐ
いなさい
ゆるあ
あこゝこぐ
ころさん
まびじゃ
わしゝ

この

北嶺

京

えか

あのくそふ
ゆくしまい

市兵衛

おさるふろへいり
しるまたいどころで
えんぞもちつとろまい
さうるとこゝらて
おくれといひぞも
大ばくちぐふく
ぐもるものが
ふじゆう
じゃ

とて今日は法輪寺より至りて北嵯峨より趣き釈迦堂の前
なる木具屋とのゝる旅店より入る。今夜いとゝ宿りとさゞめぬ
市兵衛親子は終夜さのゝの事ども思ひ出して花の香とる
春風の音までも只何とゝく物すごくて霖もやゝ旅路乃
憂と思ひまゐつ兎角するうち夜もふけく雞とゝゆるゝ
立るふ漸くとゝろも堵く朝の支度ととのへ稍ゝとて立出
て清涼寺の釋迦牟尼佛より叅詣し小倉山野々宮天竜
寺をとゞめ此方彼方の古跡と尋ね巡りて終より下嵯峨より

つゞく法輪寺の虚空藏より詣ぐ。十三色の供物とさゝげて智福
といのり夫より千鳥ヶ淵戸ゐせの滝など見めぐりて渡月
橋よかゝるにすでゝ午の時刻より及びくれば北の川岸なる茶店
よりく中食をとゝのへ此所より嵐山とゝゆゞめゆるゝ実や今日
来りべと詠ぜし哥のごとく咲ものこゝび散もくゞめび雲と
詠め雪とゝゞゝ景色なるゝさるほどに花見の雅佰川邊
より充満なるゝ十三詣の貴賤老若うち雑りくの往還ゆへ
より其羣集大ゝなるゝ大井川香とゝゆる楠の上よりゆく人

すゞ〜雨の夕暮と詠られし渡月橋も今日い行人おゝ合く。哥ふも似ざる風色ろう。されば大堰川の岸の辺アまい甚さよげある茶店軒端とゝ〜べ客を招く仲居の声かゞびすゝく。紅ひの前ぶれ春風ゑ翻るも今日の景色のひとつるゝ〜此方ゑいそひく糸竹の曲と志〜べ諷ふあゝ舞あり。まさい川端ゑ擅うちしたく竹筒瓢と頃け哥よゝ詩作アて幽艶と賞する風情何まも一真ゑ〜ぶるいゝて二人の娘いうちゝゑゞあ只管ゑよろこび暫時ゑゝゑ遊び〜ゞ市兵衛い此所よう

廣澤大沢と經て御室ゑ行べ〜と同胞と伴ひて〜と立いく。元来〜道ゑ趣ろゞゝと川岸と下るとゝ〜も羣集の間より彼方と見まべ渡月橋の半と思〜ゝゝ過〜日環山ゞゝゝふ淀川ゑ投こゝゝれ〜三個の悪黨こゝゝと切手ん〜で来まるいゝゝさゝ妹花ハ目ざゝく見ゝ〜ゝと姉ゑ斯ぞとおゝ〜ゝゝゑ大に駭さ膽てけ〜此方ゝく出會びいゝふせん何方ゝもあまのゞまんと妹の手と引つまつゝ。ゝ〜来〜道と逸散ゑ北嵯峨さゝそ逃ざゝゝと。三人の悪徒も杳ゑ雨女と見つけ〜ゝゝ此

その返報を目のあたりせてくまんぼと群集の中をおし分く。此面彼面と尋ぬれど何もなる娘と伴ひられども市兵衛父子にあらざれば益々心をつゝ立ども數万の參詣人引もきらべ前後左右を行あらう進退おりふる任せざれば宝山を入るゝ手を空しくする心地せり扨又両人の女子は大ひる周章ふためくく親市兵衛を此よしを告る心も出ばしく。只後迎ふ附そひく来ませることを思ひつめ脚をまろせく逃のびつ釈迦堂ちうに辺をさて走るうち。おどゝく

此所を立ぐおう。爺さぬいうをそ。跡打ぬれど如何しく此縁由を告ざれば共を迎べき様もなく。其うげさへもぬへざりしば此は漸くこうづき。余を心おどろさしめ此うをと告びしを。我のゝ走ぬるれば跡より来まさぬも所理なり。その上此事知ぬを恐りべ。彼所を寛ゝしまふうち彼三人を見つけしを。辛を目を拭ひ、おいさびやさうとそ父をたづ行ぬば又悪徒を出會べし。鬼やせ面角やせ面ゞと同胞が互ひを面を見合せく。涙ぐめるぞ不便なり

そうか
市兵衛

この

○川邊の菫草

且説京師三条通室町ゟ西河屋禮三郎と云る豪家あり。先祖より諸廣の御用と達し。家きわめく財宝ゟ富ミ狀主人ひさすゝゟ比て金銀衣服何くもとゝあく与へ相樸奥行の間ハ一日も見物をかくることなく。飲食とゝ[illegible]きく義勢とゝきりさるほどゟ環山ハ今般京師ゟ登まる用ハ此且那の機嫌と伺ひん〻ゟ態〻〻ゟ登ミしゝり扨狀主人礼三郎ハ今日ゟ嵐山の花見ん〻て朝のほどより多く

の供人とゝ〻しつゝ下嵯峨る三軒茶屋ゟおりむゝまるゞ。環山もゝろゝもゝ隨ひ行べき筈ゟ北野の辺ゟ擾ゝ用事のゝりつるゝ其事と仕果く後ゝとより歸路の迎ひゝゞ。恭るべきよゝと告ゞ沖津浪と連ぶち北野ゟる用ゝる家ゟゝり巨細の用ゝもゝのゝつ。稍く御室より廣沢ゟゝり北嵯峨ゟ出くすでゟ清涼寺の門前とゝぶ。野〻宮の方へ至ゝんとゟ所ゟ昨日別まゝ西人の娘ゟゝゟ彷徨く。深く愁ゟる形勢ゟれバ力右エ門ハ近く立よゝ。

両女ともに甚早も。此里に入来たるひしと。いふ声ありて同胞の
すい悪者の来たりしかと。駭きつゝも面見あはせ又うましさに
語るべき詞も出ねバカ右卫門が。袂に両人に取すがりて泪に
くるべかりし。此方ハ一圓其意と得ぬ。是ハ何ぬしよりの仕合
せ。父御ハいかに仕ぬひしと。亀之助ともに力をそへて介抱
し。其事のかたと尋ぬる。両女ハ申しかねとゝめ先刻
下崖岩我ゆて悪徒どもに出合くすでに危ふき場所なりし
と辛ふしくこゝに遁きしに始より。心せくまゝ父に告ると忘れ
しに。終に別きく行ぐさまに又彼方につゝく父と尋ぬ
るに悪者どもに出會ぬんと。ひんし煩の折うるよしと。
落もるく物ぐさに力右卫門主従ハ斯とさくりさてハ三
人の悪漢ホハ淀川の水屑ともなるぐまと此あらに俳徊
し息女ホに仇とるべんくるに。身の程ぐちぬ虚氣者
めー。吾出會ぬに尚もてさん。さりあぐ我も遁きぬ用あ
るく。此所に来たつれば是より両女と伴ひて。父御の行方
と尋ねん事もなりぐく又息女ホも共ほとりに長居させ

んも氣づかはしく手を拱き遽しくも思慮をめぐらし稍有て
て申す。息女ホ昨夜申ごろ旅籠屋へ何方ぞと尋ぬるよ。
釈迦堂前の木具屋のよしなれば力右エ門ハ打うなづき。
直ち両女を伴ひ〳〵彼木具屋へゆき〳〵主人に對ひ事
乃ものまねと物がたり。急に駕二挺と仕立させ是に同胞
の女子と乘しめ弟子沖津浪に言つけ三条の定宿なる
著屋へゆき。不自由なれば申し取計ふべし。其中こゝもと久
るべし。又父御ゆもされ是より花見の場所に用あまた。

必らず彼方に趣く道にて巡りて會事もなりぬべし。両女
もに心と安んじ父御の帰りを宿にて待べし。早く〳〵と
急がせば駕の者ども心得足を早めくかを出ル沖津
浪もおくまじと駕に引そひて行ぬ。力右エ門いかと
見おくりて稍て木具屋へ主人に對ひ若彼両女の親ある人
尋ひ来らハ如此〳〵のよしと詳にいふて三条の著屋とお
しへ〳〵ぬいまらしと懇にたのみて下差出れさして趣きつゝ往
来ふ羣集に目をくばり。市兵衛に會まほしと遠近を

力左門
みちすがら
さいつけのョ
仲津浪
アイそりやぐらえで
ごんル
市兵衛どの
ととく
やの
おやじぶ
ちくり
いつくおいそ
やりうえんせ
いとさんぞうりをいてさ
うまもあるきやすくさ

ハイ〳〵
ハイ〳〵
たのもまル
ぞ
この
ふる
いとさんぞうりをいてさ
うまもあるきやすくさ

尋ねまども。既に下嵯峨る。三軒茶屋のほとりあるべくれども。曾て行方知れざれば力右エ門ハ只管に心ゑ尽おりへども。且那の方も行びしてハ機嫌のほどもとり難くれば前も気づひ後も向ひ沈吟に小首を傾けるゞ三軒茶屋に趣くにざめき諷ん酒宴の最中にて哥妓舞妓花の山川と隅て櫻木と色をくぶる景色ゆうさか右エ門ゞ来ると見るより。是ハ環山ゆ待ゆ。何ゆ斯ハおそゆ〳〵と主人がいゝ附属も関取いく待ゆ。快方へ

来ゆ〳〵と平とゝりて。席と譲ゆ饗應ハ速右よりも左よりも義盃の巡ゆ来て一時間も酒ゆらゆるく遅くゝゝゝし侘言と演るすゝ間もゆ〳〵ざりゝ

復讐野路の玉川巻の二終